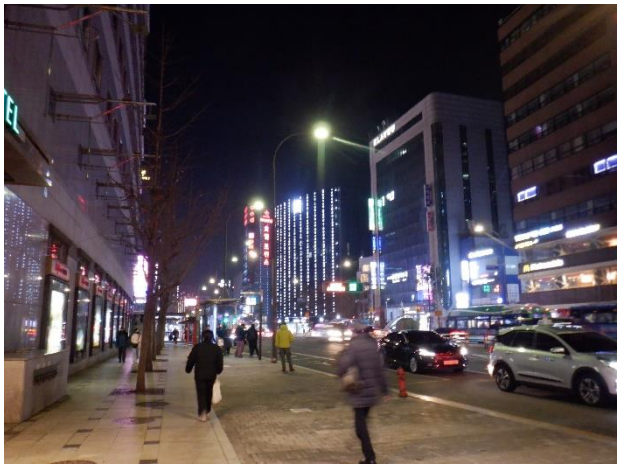
百済の仏塔、釜山の港　～2024 韓国旅行記～

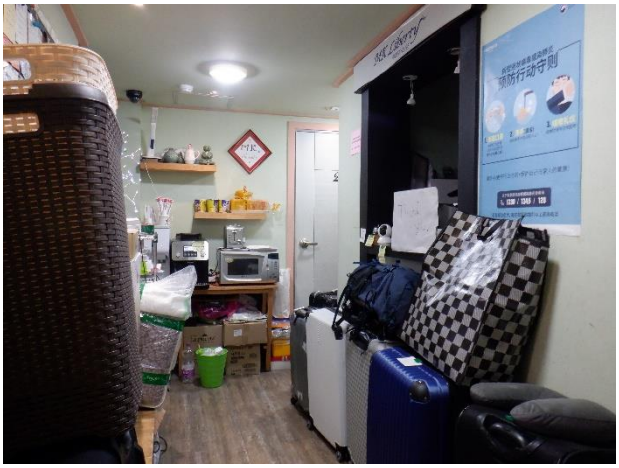
中部国際空港を出た飛行機は、2 時間ほどで韓国・仁川空港へ近づいた。３列シートの通路側の席からは景色はほとんど見えなかったが、反対側の窓に、夕日を受けて光る大きな橋が見えた。入国審査を終えてロビーにでる。奇麗な国際空港である。外へ出ると名古屋よりだいぶ寒い風が吹いている。空港の地下から直通列車に乗ってソウルを目指す。車内の雰囲気や乗客マナーも日本とほとんど一緒である。うす暗いガラスの向こうに並行して高速道路が走っており、車のスピードだけは日本より早くみえた。やがて線路は地下に入り、通勤電車の様相を帯びてくる。外国人の密度がどんどんと薄くなり、しばらくするとソウル駅に着いた。

一国の首都の駅前にしては寂しい感じがするソウル駅の西側に出て、適当に周辺をぶらぶら歩いて宿を探す。一本入った路地にゲストハウス風の宿があり、他には宿らしいところは見当たらなかったのでそこに入る。スーツケースが大量に積み上げられたフロントで、おじさんに「こんにちは」と挨拶してみると普通に通じた。値段は 45,000₩で 5,000 円弱くらいである。部屋はだいぶボロく、値段の割に高いような気もしたがソウル駅前だし、正月だしこんなもんかと思う。

部屋で一息ついた後、ソウルの街へ出る。ソウル駅の反対側へ行くと、高層ビルが林立し夜景が輝いている。南大門を遠目に見ながら南大門市場へ行ってみるが、多くが既に閉まっており、人もまばらで閑散としていた。適当に横丁みたいなところに入る。言葉が全く通じず、ビビンバ、ウドンのみ通じて注文。ビールを頼む。暖かいウドンが腹にたまると、ようやく一息ついた感じがして、明洞の方まで歩いていくことにする。ソウルの街で感じたことは、人や車通りは多いが、日本の都会に比べて街灯が少なく薄暗いということである。みな、暗闇のなかをぞろぞろ、ビュンビュンとうごめいているような感じである。ただ、明洞に着くと違った。夜市が出て、建物は光り、明るさは日本の繁華街と同様であった。帰りは地下鉄でホテルに戻り、シャワーを浴びて 24 時に寝る。



ソウル一の繁華街 明洞



適当に見つけたソウル駅西口の宿

次の日、１月４日。今日もソウルに泊まるか、列車に乗って移動を始めるかまだ迷っている。とりあえず、移動するとしても日中はソウルを観光しようと思う。それでまだまだ物足りなければもう一泊すればいい。ソウル駅前でモーニングを食べた後、地下鉄に乗って東大門の方へ行ってみる。

鐘路五街駅から地上へ出て、近くの広蔵市場へ行く。巨大な市場で地元民や観光客でごったがえしている。清渓河を挟んで広蔵市場の対岸は和平市場で、こちらは大量の帽子、服、塩ビ管やらが延々と売られている。コロナ後初の外国旅行に混沌さ、ローカルさを求めていた自分にとって、韓国にもこのような市場があるのは嬉しかった。

　そのまま歩いてソウル城壁の近くの下町にいく。鯖や鰆を店頭で焼いている店が多くある。鯖の塩焼き定食（こう書くと和食みたいだが、キムチやら漬物やらが大量についてくる韓定食）を食べる。食後、ソウル城壁へ登る。街は霞み、南側には白っぽい高層ビルが見渡す限り続いていた。
その後、宗廟へいこうとしたが、外国人はガイドツアーだけ、ということだったのでやめて、周辺をぶらぶら散歩する。

　やはり今日中に次の町へ移動することにして、いったんソウル駅前の宿へ戻る。ザックを回収し、京釜線の列車が多く出発する龍山駅までは地下鉄で移動する。龍山駅もターミナル駅らしく大きな駅だった。とりあえず天安という街までの切符を買って、15:15 ムグンファ号に乗り込む。列車は８両くらいで音もなくゆっくりとホームから出発した。しばらくして漢江を渡った。川幅が広く、大陸の川という感じである。車内は暖かく、寒暖差でウトウトする。1 時間くらいで目的地の天安に着く。

広蔵市場

東大門市場周辺

鯖焼き定食（11,000₩）

漢城城壁よりソウル市街を眺める

天安の駅前に出るとロータリーがあり、線路に沿って街が広がっている。ある本に、韓国では♨マークを目印に安宿を探せばよい、と書いてあったのでそれを求めて駅前を散策。少し北へ歩いたところに、温泉マークがあり、客引きらしきおばさんもいたので泊まれる？と聞いてみる。とりあえず２階のフロントに連れていかれるが、言葉が全く通じない。タジタジしていたら「中国人か？」と中国語で聞かれたので「いいえ、日本人」と答える。「両万五、一晩両万五」と言われ、値段も理解できた。部屋を見たら昨日の宿より広くて清潔だったので喜んで泊まる。ただ、Wi-Fi はないらしく、明日以降の情報が得られず。

休憩してから、日も暮れたころに夕飯を食べに外出する。宿の前道を進むと途中から市場になり、焼肉やら、海鮮やら色々店が出ている。徘徊した後、市場の中央にある、一人でも入れそうな店を選んで入る。メニューが全部ハングルで読めず、厨房の鍋を指して、これ下さいと日本語で言う。広蔵市場で覚えたソジュも注文。出てきたのは豚足の鍋だったが、外が寒いので温かくてよかった。宿に Wi-Fi がないので、明日の時刻表を調べに天安駅へ行く。夜でも列車があるようで、待合室は暖房が効いて人も多くいる。明日は扶余という町へ行くことに決め、駅員室に扶余の最寄りの論山駅までの列車を聞きにいく。部屋では自分より若い３人の職員がおり、色々と調べてくれた。無事に列車の時刻も分かり、駅を出る。夜も更けて、人通りの少なくなった駅前の地下道、市場を歩いて宿へ戻った。シャワー浴びて 23 時半寝る。

ムグンファ号で天安へ

天安駅前

一泊 25,000₩の激安モーテル

豚足鍋定食

次の日、7 時半起床。外はまだ薄暗い。朝の市場を抜けて駅へ行く。切符を購入してから、駅内のパン屋でホットドッグとコーヒーを買って食べる。コーヒーは車内で飲むようで持帰り用にしてもらう。8:50 ムグンファ号で天安を発つ。今日は昨日よりも霞んでおり、あまり景色は良くない。忠清北道の枯野を列車は南下いていく。道庁所在地の大田の手前から京釜線と別れて湖南線に入り、少し進むと論山駅に着いた。「地球の歩き方」に書いてあったとおり、駅を出てから右方向へ進むとバスターミナルがあり、30 分くらい待って扶余往きの 701 番バスに乗る。お金の払い方が分からず、運転席の後ろに座ったら、運転手がメータで教えてくれた。40 分くらいバスに乗って扶余に着く。乗客は市場から乗ってきたお婆さんがほとんどだった。

扶余はかつて泗沘とよばれており、古代日本とも関係の深かった百済の最後の都であり、関連する遺跡や博物館がある歴史の町である。最も有名な定林寺址は通りからも見えて無料で入ることができる。広い敷地には石塔が一基と、近年復元されたらしい日本でいう飛鳥時代風の建屋があるのみ。建屋のなかには石仏坐像があるが、これは高麗時代のものらしく、百済の時からの残っているのは石塔だけである。平日だからか、観光客はおらず公園の整備業者が作業しているだけで静かである。かつて東洋全体の利害がからみ、各国の軍隊や悲劇を伴って歴史の一大舞台になったはずだが、その後の膨大な時間、風雨、人目、開発、研究のために当時の香りや色はすっかり洗い落とされてしまった感じである。ただ百済という国があった記念碑のように、柔らかい日差しのなかに建っていた。

8:50 天安駅

論山の駅前　地方の駅前という感じ

定林寺址

こっちは少し新しい仏像

昼食は町中の食堂で食べる。ここでもやはり言葉が伝わらず、またキムチ鍋定食を食べる（美味しかった)。食堂のおばさんは「イルボン、ジチン、タイヘンダ」と言っており、何となく日本の地震を心配してくれているんだなということが分かる。食後、町の北側にある扶蘇山へ行く。入口でザックを預けて、早歩きで遊歩道を歩く。最も高い場所には泗沘楼という建物が建っており、楼上で休憩する。山のすぐ北側には白馬江（錦江のこの辺りの名称。白村江はこの川の河口）が流れており、北側に「白馬長江」という扁額がかかっていた。

山を下ってからバスターミナルへ戻る。思ったより長く扶余に滞在してしまったので、とりあえず大田往きのバスの切符を買う。20 分くらいでちょうどよくバスが出発となる。1 時間半くらいで大田南西バスターミナルに着いたが、このターミナルは郊外にあり、路線バスを拾って 20 分くらいかけて大田駅まで行かねばならない。駅に着いて、とりあえず大邱までの列車をさがす。丁度良いムグンファ号がなく仕方ないので、東大邱までのセウマル号の切符を買い 17:36 大田駅を出発する。セウマル号は新しい車両で、日も暮れてしまい景色も見れないので早めに下車することにする（KORAIL は改札がなく、切符を買ったらどこでも下りられる)。錦江と洛東江の分水嶺を越えた東側にある、金泉という町で下車する。

扶蘇山最高点にある泗沘楼

白馬江の眺め

キムチ鍋定食

扶余の街並み

昨日と同様に温泉マークを探す。モーテルを見つけて 40,000₩で泊まる。一人で泊まるような感じじゃないが、無事寝床は確保できた。フロントのお姉さんにコンセントを借りて充電。金泉の町にもやはり市場があり、焼肉屋に入る。焼肉を頼んだつもりが、目玉焼きとキムチ鍋定食が出てきた。定食自体は美味しいのでビールも頼んで食べる。食後、夜の駅前を少し歩いて宿に戻る。金泉は天安よりも小規模な、山間の寂しい街である。23 時前に寝る。現金が僅かしかなく不安だったが、宿でも食堂でもクレジットカードが使えて助かった。

大田→金泉はセウマル号で

一人で泊まるのは気が引ける…

４日目の朝。この旅で最も早い 7 時に起きる。モーテルを出て市場を抜けて駅まで歩く。昨日までと変わって空気が澄んでピンと冷え込んでおり、残った三日月が朝日を受けて光っている。いかにも朝が鮮やかと書いて朝鮮、という感じだった。

金泉駅内は早朝にも関わらず結構混んでおり、土曜日ということで大邱や大田に出かける人が多いようだ。窓口でムグンファ号の切符を買うと、満席のようで大邱まで立席になった。駅内のキオスク的なところで朝食のパンとコーヒーを買う。8:14 列車で金泉を出発する。立席といってもようするに自由席で、先日と同様の窓側の椅子に座って車窓を眺める。大邱からは指定席車両に移動したが、席は通路側で、となりのおばさんはカーテンを閉めてしまったので途中から先ほどの所に戻って景色をみたりする。

列車は韓国最長の河川、洛東江に沿って走っていたが、川からそれると次第に高層マンションが出現する。さらに進むと斜面が多い港町らしい光景になり、まもなく釜山駅に到着した。釜山駅もソウル駅と似て、ホーム上の２階が広いターミナルになっている。２階のコインロッカーにザックを預けて、手軽に散策を開始。釜山駅は港に建っているので、駅前というのは西側にしかなく、駅と山の間にごちゃごちゃと色んなものが集まっている。大通り裏に入ると両替屋が大量にありレートの良さそうな所を探す（韓国の両替屋はレート表を掲示していない)。最初 10,000 円で 870,000₩と言われて迷っていたらじゃあ 900,000₩でどうだと言われる。それでもソウルに比べて安いなぁと思い他をあたる。２軒目で 10,000 円で 900,500₩と言われ、ここで両替した。1 軒目と 500₩しか変わらずなんとなく申し訳なかったが、これで無事に現金は手に入った。

中華街、ロシア人街を抜けるとオフィス街っぽくなり、土曜日の今日は人はまばらである。釜山はソウルに比べて車の運転が穏やかで、日本が近いのと関係があるように思う。しばらく歩くと南

甫という港の近くの繁華街になり、周辺に魚市場があったりして人が多い。ここが観光客にも有名なチャガル市場で、海鮮ものがたくさん売られている。車内でパンを食べただけだったので露店ではんぺんを、食堂で刺身定食を食べる。食後、海とは反対側に歩く。この辺りも市場になっていて日用品やら衣服などが大量に売られている。大庁路まで歩いてからは方向を変えて、龍山公園を抜けてと南甫の大通りに戻った。

早朝の金泉

京釜線の車窓より洛東江

釜山到着

チャガル市場　港町釜山らしい光景

　対岸には狭い海峡を挟んで影島があり、日本統治時代の橋を歩いて渡る。対馬海峡が見られそうな場所を求めて、適当にバスを拾う。バスは島の北側の方へ進み「青鶴市場」という停留所で下車する。文字通り市場の前で、アーケードが急な坂道に延びていた。市場を抜けたあとも坂道は続くばかりか、徐々に斜度が急になっていく。前を歩くお婆さんはどんどん早く登っていってしまう。町は山頂に向かって広がり、最上部はマッチ箱みたいなコンクリートの家が窮屈に配置している。その最上部に奇麗なカフェ兼展台がある。カフェは休みで、展望台のみ貸切であった。釜山港周辺が良く見渡せる。さっき歩いた南甫や龍山公園も見えている。港には今晩乗るフェリーが停泊中である。街と比較してかなり大きく見える。

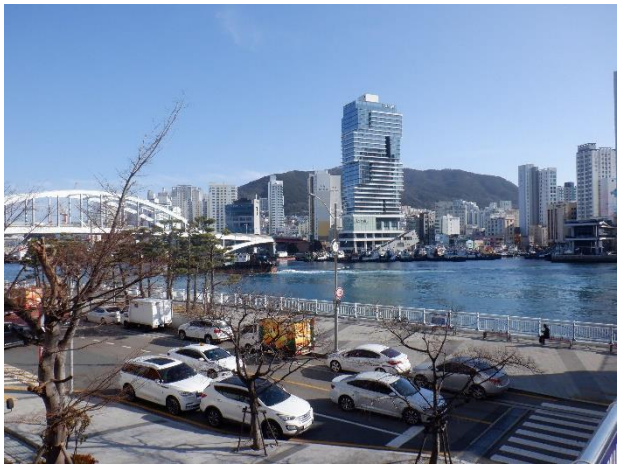
　景色と反対の山側を見ると、散歩らしい人が多く歩いている。影島の山頂部分を周回するトレイルがあるようだ。反対側、南側に行けばもしかしたら日本の対馬が見えるかもしれないという思いで時計周りに歩く。松林のなかにヤシマットを敷いた遊歩道が続いている。やがて道は山の南東斜

面をトラバースしはじめるが、高層マンションだったり、松林だったりに隠れてなかなか展望が開けない。つぎこそは、こんどこそはという思いで先へ先へ進んでしまった。岩場で一部木がない場所があり、そこから対馬海峡が良くみえた。しかし、島影は見えず、潮巻く海峡が見えるだけだった。やっぱりな、という思いでトレイルを外れて、街の方へ山を下った。級な坂道を下っている途中にふと真南をみたとき、海の向こうに僅かに細い山並みが見えた。水平線近くは霞んで見えなかったが、一定の標高以上の稜線がほんの薄っすらと見えた。

対馬の地図を確認してみる。釜山が最も近いという対馬最北部は、起伏は激しいが標高は低くなっている。標高が高いのは少し西よりの、釜山から見て真南にみえるあたりだった。ユーラシア大陸の最先端から、碧海蓬壺、日本が見えている。そこには確かに現代の国境があり、斉明朝が、チンギスハンが、豊臣秀吉が（近代日本でさえ！）無くすことのできなかった隔たりがあるのだが、確かに地理的には続いているのだという確信があった。

刺身定食

国際市場周辺　賑やか



南甫より影島をみる

釜山港を一望

2 年前、博多から船で対馬に渡り、原付で旅行したことがあった。最北端の鰐浦にある展望台からは、曇空の下についに韓国は見えなかった。目をこらしても、霧がかかった水平線しか見えなかった。鰐浦の前日は対馬海峡に面した志多留という小漁村のバス停で寝た。夕方から前線通過のための雨が降り出し、雨風の音にびくびくしながらカップうどんと缶詰を食べ、長崎の中華街で買った紹興酒をチビチビやっていた。バス停裏の集会所で行われていた寄合が終わると、車通りもなくな

り、沖合の漁火が煌々と揺れていた。その時の対馬の印象は、天気のせいもあってか、まさに辺境の過疎地という感じだった。僅か 49km 先にはこんなにも若く、活発で明るい都市があろうとは想像も出来なかった。

あの時、韓国が見えていたらどう思っただろうか？対馬の延長として、モノクロで暗くて古い釜山の街を想像しただろうか？それとも、何か外国的なもの、大陸的なもの、歴史文化的な隔たり感じて、別の印象をもっただろうか？少なくとも、自分の対馬のイメージは「韓国が見えなかった」という官能的で単純な理由のために日本の果てとして固定された。いま南に見えている、光の中に消えてしまいそうなほど明るい島がそれだとは、なかなか思えない。

この周辺は大学のキャンパスのようで、近くのバス停は「高神大学」となっていた。50000₩札しかなかったので近くで両替を試みる。最初に入った料亭っぽいところでは、お姉さんにムリ。。と言われてしまった。隣の商店で水を買って無事小銭を得る。来た方向へ戻るバスに乗ろうとすると「違う、反対側だ」と言われたので、疑問に思いつつ反対側のバス停でバスを待つ。すぐにバスが来て、乗る際に「南甫ステーション？」と聞くと「そうだ」という。バスはこのあたりが始発になっていて、時計周りにぐるっと影島を一周して南甫へ戻るらしかった。坂を下って、バスは夕暮れの町へとおりていく。香港ほど都会過ぎず、長崎ほどの田舎でもない。

対馬海峡　対馬は写真では写らず

南甫へ戻るバスより

釜山駅前の中華街

炒面

島の西海岸に出ると、夕日が海峡を染めていた。このあたりは観光地らしく、中国人、日本人など多くの観光客がバスに乗り込んできた。多くは終点のチャガル市場まで乗るようだ。隣の女性はアジア系の同行者らと英語で話していたが、スマホは日本語でいじっていた。南甫のバス停に着いて「すみません、降ります」と言うと、驚いたように「はーい」と言われた。

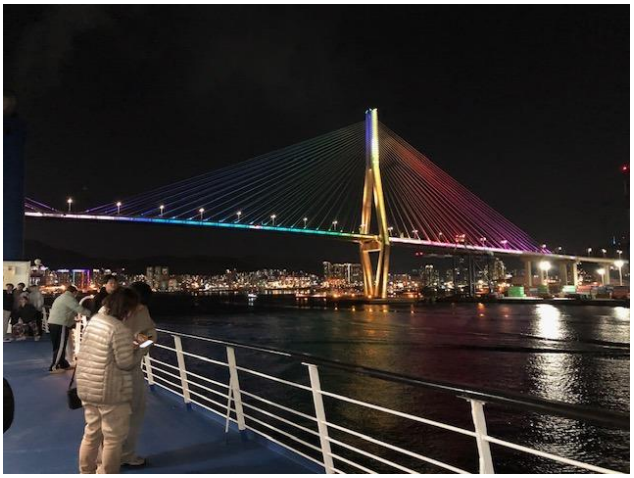
夕方で人の多い南甫から、帰りは地下鉄に乗って釜山駅に帰った。フェリーは 18 時半までにターミナルに着けばよいので、まだ 1 時間ほど余裕がる。お土産を買った後、地下鉄駅の裏にある中華街で新天閣という食堂に入る。漢字のメニューで頼みやすく、炒麺と韓国ビールを注文する。後ろの机では親戚っぽい人達が世間話をしていてゆるい雰囲気。お会計の際、お姉さんに「一万四」と言われる。どこから来たの？、中国語はどこでやってたの？（たぶん）と聞かれ、「日本から」「大学で」と答える。お姉さんは「イチバン、イチバン」と日本語を言っていた。「さよなら」と言われたので「再見」と応える。やっぱり現地の言葉が通じると、嬉しい。今回もせめて食堂で会話できる程度の韓国語を覚えていけばもっと旅の質が高まっただろうなと反省。特に、ハングルは漢字と違ってぱっと見で意味が分からないし。

さて、これで夕飯も食べた、お土産も買った。さらば釜山、韓国よ。釜山駅の正面玄関の階段を上がり、ザックを回収し、駅を横断して反対側の釜山港国際フェリーターミナルへ歩く。ターミナルにつながる高架歩道からは、日中に歩いた影島の夜景が白・黄・紫に輝いていた。夜景は点滅せず、黒い海に映っていた。

予約メールには 18 時半までに出国手続きを済ませること、と書いてあったが実際にいってみると 19 時～19 時半に出国手続きをして、ということだった。無事出国し、イミグレの部屋に映るとガラガラだったターミナルに比べて、かなりの人混みである。やがて乗船が始まり、30 分くらいかけて全員がフェリー・ニューかめりあに乗船。今知ったことだが釜山からは下関にも毎晩船がでており、日本の移動代がケチれるし、こっちにすれば良かった。。と少し思う。

２等船室は 8 人の相部屋で、ほぼ満員である。同室の一人は、大分の IPU に留学しているらしく、来年の就活が不安だと日本語で言っていた。乗客の 9 割以上は韓国人で、日本人は見当たらない。風呂に入ったり、デッキでハイボールを飲んだり（それくらい暖かかった）しているうちに出航になる。デッキ上で多くの韓国人に交じって釜山の夜景を眺める。船は釜山大橋の下をくぐり、外海へでていく。やがて夜景は遠く小さくなっていき、一本の太い光の線のようになっていった。

奇麗なフェリーターミナル



さらば釜山港